

学級内における中心的な人物との関係性と いじめ加害行為との関連

唐 音啓 (東京大学)

キーワード：いじめ, 友人関係

問題・目的

平成 29 年度の国内のいじめ認知件数は, 32 万 3808 件と, 過去最多を記録しており (文部科学省, 2017), 学校におけるいじめ問題は依然, 重要な問題となっている。近年, 攻撃行動をとりながらも自尊感情が高く, 仲間集団の中心的な存在であり続ける「知覚された人気」(Perceived Popularity)を持つ人物 (以下 PP 児) の存在が着目されており, いじめの加害者となり得ることが指摘されている。

いじめを, 集団構造の問題であると捉えたとき (森田ら, 1986), いじめのひとつの形として, PP 児を中心とした加害者集団が形成されている可能性が考えられる。先行研究では, PP 児の個人特性 (Cillissen & Mayeux, 2004) や行動特徴 (Hawley, 2003) に焦点が当てられてきたが, 周囲の子どもたちと PP 児との関係性は明らかにされてこなかった。そこで本研究では, PP 児との関係性が, 本人の学級におけるいじめ加害行為と, どのような関連を持つかを検討することを目的とする。

方 法

調査対象 2017 年 11 月-12 月, 関東 6 大学に在籍する大学生 390 名のうち, PP 児と SP 児を区別して回答した 253 名を分析対象とした。

調査手続き 中学校 3 年生時のクラスを想起させた上で, クラスの中で以下のように教示した人物を 1 名ずつ思い浮かべてもらい, イニシャルをおよび性別を尋ねた。(1)「クラスの中で最も中心的で目立っていた人を思い浮かべてください」(PP 児), (2)「クラスの中で好かれていて, かつあなたが好感を持っていた人物を思い浮かべてください」

分析対象項目 ①PP 児評定の項目として, (1)友人関係における共有様式尺度 (池田ら, 2013): 単項目, (2)いじめ関連行動 ②自己評定の項目として, (1)いじめ関連行為 (橋本 (1999), 王ら (2016) を改変) を分析対象とした。

結 果

一要因分散分析による 4 群の比較をおこなった。まず, PP 児との関係性として, PP 児との行動頻度を問う項目「あなたは, その人物とどの程度行動をともにしていましたか」の得点について, 平均値で分割し, 2 群を作成した。次に, PP 児の学級内におけるいじめ加害行為への関与の有無を明らかにするため, いじめ関連行為の加害立場項目得点について, 平均値で分割し, 高低群を作成した。各群の高低群を組み合わせ, 「加害関係高群」(PP 児との行動頻度高×PP 児のいじめ加害高), 「加害関係低群」(PP 児との行動頻度低×PP 児のいじめ加害高), 「非加害関係高群」(PP 児との行動頻度高×PP 児のいじめ加害低), 「非加害関係低群」(PP 児との行動頻度低×PP 児のいじめ加害低) とした。

PP 児との関係性と, いじめ加害行為との関連

従属変数をいじめ加害行為とし, 各群の人数はそれぞれ, 加害関係高群 46 名, 非加害関係高群 48 名, 加害関係低群 59 名, 非加害関係低群 47 名であった。PP 児との関係性の効果は有意となった ($F(3,195) = 11.37, p < .001$)。Tukey 法を用いた多重比較の結果, 「加害関係高群」と他の 3 群間で有意差がみられ, さらに「非加害関係高群」と「非加害関係低群」間で有意差がみられた。すなわち, 学級内における中心的な人物 (PP 児) と行動ともにしている人物ほど, いじめの加害行為を多くとっていることが示された。

考 察

本研究では, 学級内における中心的な人物 (PP 児) との関係性が, 本人のいじめ加害行為とどのような関連を持つかを検討した。その結果, PP 児とともに行動している人物ほど, いじめ加害行為をとりやすいことが示唆された。今後は, PP 児とともに行動している人物が, PP 児とどのような関係性にあるかを緻密に検討する必要があると考えられる。